

建築家の

往復書簡

原広司 — 磯崎新

10
.....

建築は、

リアルであると同時に、
常にイマジナリイである

幾崎新様

HIROSHI HARA
原 広司

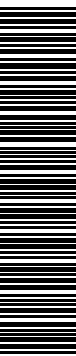


ハノイ(ベトナム)地下鉄ライン2、地下駅基本計画の一例[図版提供:アトリエ・ファイ建築研究所]

往復書簡の時間も終りに近づいているのではないでしょう
か。先回、私たちの世代の主たる関心に、少しばかり触
れましたので、ひきつづきお話しをおききたいと思いま
す。それは、一言で表現しますと、フィクションナリテイ、虚構
性についてです。

私たちは、強制疎開や焼け跡に立つて、それぞれに生き

始めた。この情況が、現実的な出発点であることは疑う余
地はないのですが、意識にあった出発点は、もう少し前の時
期、つまり二〇世紀の最初の1/4世紀あたりであったので
しょうか。この時期の充実ぶりは、改めて言及する必要はな
いと思われます。建築・美術・文学ばかりでなく、人文科
学・自然科学を包含した文化活動の高潮期であり、私た



9011150654

LIXIL
Link to Good Living

株式会社 LIXIL

トステム・INAX・新日軽・サンウエーブ・TOEXは、株式会社LIXIL(リクシル)の製品ブランドです。
株式会社LIXILはお客様の多様なニーズにお応えする商品とサービスをお届けしていきます。

ちは、ロシア・フォルムリズムやシュール・レアリスムをまたずとも、表現あるいは虚構をめぐって、出発の足がかりとしました。

こうした出発点のずれは、それ自体、今日ここで、私が話題にしたいと考えている虚構性にかかわっています。すなわち、リアルな出発点とイマジナリーな出発点が、時間はずれているにもかかわらず同時的にある図式。具体的には、フィジカルには苦しかったけれども、戦争をひきずっていない明るい図式、それを私たちは手許にしたと思われまます。

いろいろな出来事が継起し、戦争も現実であるけれどもある種の構想力によって支えられた虚構であり、革命もまた然りである。中学生の頃、スターリンによる「粛正」があつて、これは「どこか変だな、シナリオが違うのではないかな」と思ったことを記憶しています。これらと対極に、二〇世紀の最初の1/4世紀の文化活動の輝かしい数々の結実、美しい虚構の事例と、虚構性それ自体を考察するため

の示唆を私たちに与えてくれた。この示唆にもとづいて、磯崎さんを中核として、私たちは学習したのではなかったか。

ここで、私たちが、二〇世紀の最初の1/4世紀の素直なフォロワーを志せば、かなり今と違った可能世界があつたのかもしれない。しかし、私たちは、この壮大な舞台装置に圧倒されてか、もともと反抗的なのか、先の1/4世紀を限定された「近代」と措定して、無謀にもこれに対決しようとした。新しい虚構性のあり方を求めて。

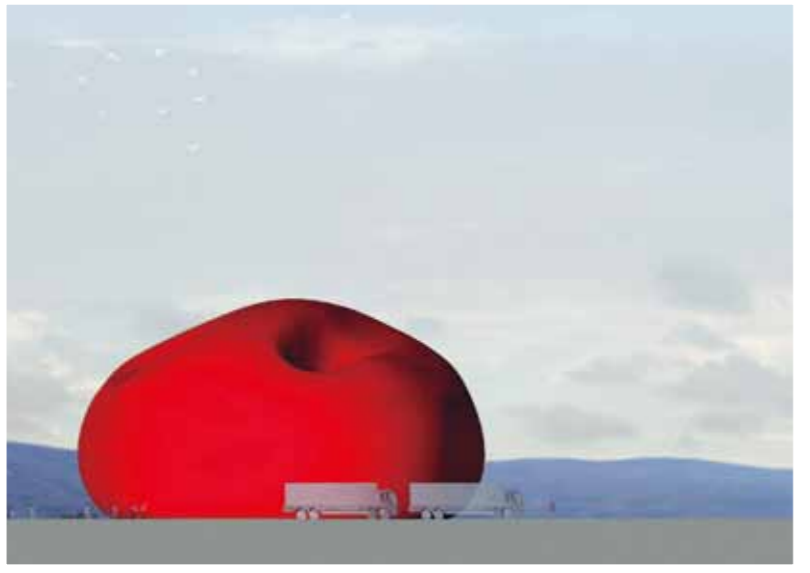
ARCHITECTUREとは、その虚構性の構築にあると考えられます。建築は、リアルであると同時に、常にイマジナリーである。そうでなかつたら、他者の身のまわりに関与する建築などつくれる筈がありません。例えば、「均質空間」という虚構があるから、そのストーリーに合せて、あるいは対抗することによって、建築をつくることができる。

話は飛びますが、せつかく数学原理主義者のレッテルを貼

原広司 磯崎新

「虚体」といういい加減な言葉がはりました。六〇年代なつかばか。SF発かマクルーハン発かはつきりしません。「見えない都市」『展望(筑摩書房)』(2011)に私は使ったおぼえがあるので、あの頃通用してました。原さんのいう虚構性はこれを原理的に語られていると思います。たしかあの頃『都市住宅』誌で二〇世紀の近代建築論の連載対談をやっていましたね。一九七〇・二〇・二五にも銀座のレストランで逢

かつて語られていた可能世界のひとつが、リアルのうえに立ちあがったためなんだろうか。この頃から乱視がひどくなつた私は、可能世界という数学的に演繹されうると聞いていたイメージを現実世界に重ね合わせることにしました。すると、私は六〇年代のはじめイマジナリー・モデル(都市デザインの方法)『建築文化』(2003)と叫んだものしかやつてこなかった。アーキテクトとして実務をやってきたとはいえ、すべてがアンビエトになつていよう。ARCHITECTUREを实体(建物)にこだわらずに超越的概念とみれば、リアル



ARK NOVA | 大洪水と大津波を(まれびと)=ストレンジャーでつなぐプロジェクト[図版提供:磯崎新アトリエ]

つたことを記憶しています。他にもない三島由紀夫が自決した日の午後でした。一同、衝撃のあまり、話がまとまらず、編集長・植田実は、あの日の記録は没にしたんだつたと思います。三島由紀夫は虚体を生きただんだ。その人とおぼつただけ口を交わしたこともあつたんだ。私は「虚実皮膜の間」という言葉もあって、長い間混乱しました。他にもたくさん理由があつたけど「都市からの撤退」と皮肉られ

もイマジナリーも同じレベル(階梯)に置けるだろう。古来、大文字の建築と呼ばれたものをさらに拡張して、造物主義(デミウルゴルフィスム)をいうことにしました。この頃から、まともな建築家としてはみられなくなるだろうと覚悟はしておりました。これも虚・虚構・虚体(ワイドライクシヨ:ヴアーチャル)とのこんがらがつたつき合いの結果です。さらに二〇年後、ポスト・3・11になつて、アーキテクト/アーティストを再定義して、その用法をあれこれ論じております(at プラス(太田出版)』No.08.2011.5/No.09.2011.8)。近いうち、ゆっ

って頂いたので、一言これに言及しておきますが、前にも触れましたが、数学を自由に練れる人だけが、数学の虚構性を構築できるのであつて、私には到底無理な話です。

そうした矢先で、ばかばかしくもありませんが、半年ほど前に、ネット上のサイトとリアルな場所との差異、あるいは同時存在を、どう表現すべきか考えているとき、ふと虚数、つまりリアルとイマジナリーを同時に記述する complex number に気がつき、力足らずに悩まされながら、模索しています。

誌面がなくなりましたが、書簡の前半は、磯崎さんの「現場」を想起しつつ書きました。余震におびえつつ、テレビを見ていましたが、水戸のタワーは、圧倒的にARCHITECTUREの所在の証しとして輝いていました。

二〇二二年八月十三日

原広司

ARITA ISUZAKI

磯崎新

るような閉じこもりをはじめたのはこの事件にも由来します。賢明にも原さんは「住居に都市を埋蔵する」『住まいの図書館出版局』(2000)という仕事を発表された。二〇年間ぐら以後に、あらためて都市の変化を観察してみると、グローバルゼーションの進行で、世界中の都市が液状化しはじめていました。都市の住宅も、ここに容れられていた人間の家族でさえ、分解して粒子化していることに気づきました。それはくり原さんと議論したいと考えているのですが、そのポイント、不意の(時間的)切断と(空間的)亀裂の発生、つまり今回のような天災や大事故が起つたとき、アーキテクトは通念では科学的に無根拠とみえる構想で対処せねばならない。無根拠を根拠づけうるか。確率論的手続きではまに合わない。

そこで、フクシマへの首都移転を思い、ついで、「日本列島の神話的構造線」という線を引き、「首都は国家的災害地へ誘惑される」という法則を考えました。両方とも証拠を示せないで信用されていません(3.11直後に流民生活して倒れ、目下戦力外通告の身ですから)。だが、原さんがいう虚数理論は、時空の襲にかかわるものだから、こんな手がかりをみつけれられているのかも知れない。こんな妄想をしております。虚妄かも知れませんが。

PS 時差でもうろうろとしていたらしく、読みなおしたら、自分でも何を書こうとしていたのかわかりません。春樹の(やみくろ)につなぐはずだったのに、忘れていました。虚数と可能世界を聞こうとしていたのに。

二〇二二年八月二十三日

磯崎新

はらひろし——建築家(一九六六年生まれ一九六四年、東京大学数物系大学院建築学博士課程修了。一九六九年、東京大学生産技術研究所。一九九七年、退官、同名教授。一九七〇年よりアトリエアトリエ建築研究所と設計共同。一九九九年より原広司アトリエアトリエ建築研究所所属。いそざき、あらた——建築家(一九三三年生まれ。一九六六年、東京大学数物系大学院建築学博士課程修了。一九六三年、磯崎新アトリエ設立。